

いぬい

有田市観光協会

会長 橋 爪 正 芳

平素は有田市観光協会に対して多大なるご支援を賜り誠に有難うございます。

有田市観光協会では、有田市のより良い発展の手段の一つとして、創立60周年を期に観光事業に様々な角度から模索し、取り組みを強くしています。

2016年より「有田市の未来を語る会」というプロジェクトチームを結成し、有田市の未来のために、今なにをすべきか日夜議論を積み重ね、市内を尋ね歩いて勉強を重ねてまいりました。

その中で、この有田市には約7000年前より人類が住み始め、先人たちが築き上げてきた史跡、文化遺産、また海、山、川の自然環境、その恵みを受けた産業の数々の歴史など素晴らしいものがたくさんあることを再認識し、それら地域の資源や価値を、内外に広く周知していくことが大事であると考

えました。

その一環として「ふるさと」の誇るべき姿を、ドローンを使った映像で制作いたしました。

*現在、「浜のうたせ」の広報用モニターで流しています。又有田市公式YouTubeチャンネルでもご覧いただけます。

しかし、先人から語り継がれ、受け継いできた有田市の各地域の誇るべき魅力は映像だけでは伝えきれなく、ペンの力でも伝えようと、この小冊子を発行することといたしました。特に児童、生徒をはじめとする市民各位に有田市の成り立ちや史跡、文化遺産、産業史等々から有田市を再認識してご理解を深めていただくことが、有田市の観光を発展させていく礎になると信じておりますと共に我が郷土に誇れるものがあることを広く伝承していただければ幸いです。

令和4年3月吉日

コラム 01	人類最初の有田市民	4
コラム 02	花びらが6枚?	5
コラム 03	須佐神社	6
コラム 04	円満寺	7
コラム 05	糸我稻荷神社	8
コラム 06	正善寺	9
コラム 07	湯浅党	10
コラム 08	明恵上人	11
コラム 09	浄妙寺	12
コラム 10	広利寺	13
コラム 11	箕嶋神社	14
コラム 12	得生寺・安生寺	15
コラム 13	立神社	18
コラム 14	望月太左衛門	19
コラム 15	有田みかん	20
コラム 16	紀伊国屋文左衛門	21
コラム 17	矢櫃	22
コラム 18	熊野古道	23
コラム 19	蚊取り線香	27
コラム 20	愛宕山	28
コラム 21	有田市の鉄道	29
コラム 22	東亜燃料	30
コラム 23	宮原神社、春日社、太刀宮	31
コラム 24	鵜飼	34
コラム 25	漁業	35
コラム 26	浄念寺と小説「有田川」	36

もくじ

有田市の地名	37
①有田	37
②椒（初島の昔の呼び方）	41
③初島	42
④港町	42
⑤箕島	43
⑥宮崎	44
⑦辰ヶ浜	44
⑧小豆島	45
⑨古江見	45
⑩野・山地	46
⑪新堂	46
⑫山田原・下中島	47
⑬辻堂	48
⑭星尾	48
⑮千田	48
⑯宮原	49
⑰宮原町東・宮原町南（新町）・糸我町西	49
⑱宮原町畑	50
⑲宮原町須谷	51
⑳宮原町滝・宮原町滝川原	51
㉑宮原町道	52
㉒糸我	52
㉓糸我町中番	53
有田市の地図	63
年表	69
参考文献・Special Thanks	70

01 じんるいさいしよ 人類最初の有田市民 ありだしみん

有田市で最初に人類が住み始めた場所はどこでしょう？意外に思うかもしれませんが、初島の沖に浮かぶ、今は無人島の地ノ島だと言われています。

今から7000年ほど前、紀元前5000年頃の縄文時代に地ノ島に住み始めた人々は木の実や魚などをとって生活していました。海の水を煮詰めて塩も作っていたんですよ。

地ノ島では長い間人が住んでいましたが、おそらくこの塩作りで生計を立てていたのでしょう。

現在の地ノ島は透明度の高さが売りの海水浴場となっていますが、昔にここで人々が生活していたことを想像してみるのはいかがですか？



じのしまいせきいっど はこしきせつかん
地ノ島遺跡出土の箱式石棺（初島公民館前に移設されています。）

02 はな花びらが6枚まい？

むかしむかし、奈良の都に長屋王ながやおうという人がいました。

長屋王は天皇の家系で頭も良く、次期天皇は長屋王だと誰もが思うほどの実力者でした。

しかし、そんな実力者の陰で彼の活躍をよく思わない人がいました。そしてとうとうあらぬ疑いをかけられ、長屋王は無念にも死んでしまいました。

はじめ長屋王は四国に埋葬されましたが、奈良や埋葬された地では大火事があったり死の病気が蔓延まんえんしたりと災害が続ぎ、人々は「長屋王のたたりだ」と怖れるようになりました。

そこで四国から、より奈良に近い紀伊国きののくに海部郡奥嶋あまぐんおくのしまというところに埋葬しなおされたのです。すると災害はピタリとやんだこのことです。その埋葬しなおされた場所というのが今の有田市初島町の「椒古墳」はじかみこふんだと伝えられています。

残念ながら、椒古墳と長屋王とは時代がずれているので、椒古墳に眠っている人は長屋王ではないと思いますが、中国から伝わった宝物も発掘されるなど、当時の地元の有力者の墓であったのは間違いないでしょう。

ちなみに椒古墳から出た宝物の中に6枚の花びらの桜をかたどった飾りがあります。初島中学校の校歌にも「六桜花」ろくおうかとして登場するんですよ。普通桜の花びらは5枚ですが、椒古墳の近くの桜の木には、たまに6枚の花びらを持つ桜の花が咲くそうです。不思議ですね。



椒古墳

03 須佐神社すさじんじや

須佐神社は保田地区の南にある大きな神社です。手前にある大鳥居がひととき目立ちますね。この神社は有田地方では最も古くてしかも格が高い神社です。

神社に関する書物の中で、現在残っている一番古いものに九二七年に書かれた「延喜式神名帳えんぎしきじんみょうちやう」という書物があります。その延喜式神名帳に有田地方で唯一この須佐神社の名前が載っているんですよ。延喜式神名帳には神社それぞれに「格付け」をしています。須佐神社は上から二番目に高い位が記されているんです。

須佐神社にまつられている神様は「素戔嗚尊すさのおのみこと」といいます。日本の神様の元締めあまてらすおおかみの「天照大神」の弟で、日本神話によく出てくる神様です。

実はスサノオをまつっている神社は全国にとってもたくさんあります。でもそのほとんどが元々京都の祇園祭ぎおんまつりで知られている神様由来の神社で、

創建当初からスサノオノミコト一筋の神社は案外珍しいんですよ。

須佐神社では毎年10月14日に秋祭りをするんですが、これがちよつと変わっていて、おみこしを階段からすべりおとすわ、海に放り投げるわ、魚のタイを命がけで奪い合うわ、それともう荒々しい祭なんです。ぜひ見に行ってくださいね。



須佐神社の秋祭り「千田祭」

04 えんまんじ
円満寺

円満寺は宮原地区にあるお寺です。

一応この寺ができたのは鎌倉時代の初め頃と記録されています。

でも、この観音様はなんと奈良時代のもので、木造では和歌山県で唯一の奈良時代の仏像なんですよ！

近くの寺の古墳にまつられていたとされる鏡が、天皇家の三種の神器の鏡と同じタイプの鏡なんです（違うという説もありますが）。

どうも今の円満寺が建てられる前からこの辺一帯は宗教的に神聖な場所だったのかも知れません。



円満寺 十一面観音



05

いとがいなりじんじゃ
糸我稲荷神社

糸我稲荷神社は糸我地区にある神社です。こ
ごんまりとした境内に大きなクスノキがこんも
りと茂り、その真ん中に並ぶ真っ赤な鳥居が印
象的な神社です。

日本中にたくさんある稲荷神社、いわゆる「お
いなりさん」ですが、その大本が京都の伏見稲
荷神社です。

伏見稲荷神社が創建されたのが七一二年、
糸我稲荷神社が創建されたのは社伝によると
六五二年：何とおいなりさんの元締めである伏
見稲荷神社よりも古いんです。

社伝って自分所の歴史を書いているものです
から、伏見稲荷より古いというのが本当かどう
か疑う人も多いです。でも、伏見稲荷がある場
所は、京都の紀伊郡きいぐんなんです。本当に和歌山と
何か関係があるのかも知れませんか。

糸我稲荷の神様が初めて降り立ったと言われ

る山のでっぺんに本宮もとみやというちいさなお宮が
建っています。

最近このお宮の前に真っ赤な鳥居がどんど
建てられて、春に先駆けて咲く「河津桜かわづざくら」が植
えられていて、インスタ映えるスポットにな
りつつあります。山のでっぺんなので行くのは
中々大変ですが、ぜひ写真を撮りに行ってみて
はいかがでしょうか。



06 正善寺 しょうぜんじ

正善寺は初島地区にあるお寺です。今は住職さんはなく、里中央コミュニティセンターの一部となっています。今でも地元の方がお参りにやってきます。

正善寺と言えば、「大日如来^{だいにちくわうらい}」という仏像が有名で、国の重要文化財になっています。大日如来という仏様は、宇宙そのものを現わしている仏様で、忍者のようなポーズが特徴です（智拳^{ちけん}印^{いん}と言います）。また、〇〇如来と名前につく仏様はパンチパーマのような髪型をしているのですが、大日如来は冠をかぶっていてパンチパーマでないのが特徴です。

普段この大日如来は正善寺横の建物に厳重に保管されているのですが、有田市文化福祉センターに連絡すれば鍵を開けてくれますので、興味のある人はぜひ連絡してみてください。

0737-82-3221



正善寺 大日如来

07 湯浅党

平安時代の終わり頃、貴族の支配が崩壊し、全国に自然発生的に武士団が誕生しました。

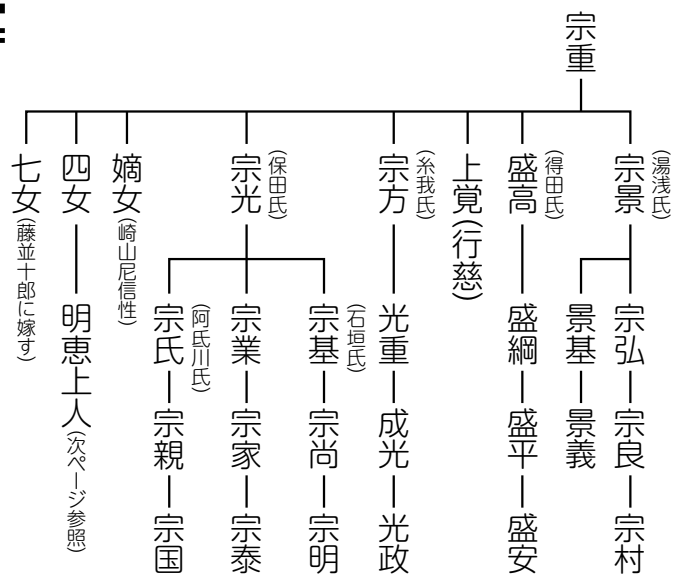
有田地方で最初に力をつけたのが湯浅党です。湯浅党は名前のとおり、湯浅発祥の一族で、勢力を伸ばした先々でその土地の名前を名乗っていきます。最終的に、北は紀の川筋、南は本宮の方まで湯浅一族は勢力を広げていきました。有田市では保田あたりで保田氏、糸我あたりで糸我氏として勢力を伸ばします。中でも保田氏は、やがて本家の湯浅氏以上に力を付けていきます。

保田氏の本拠地は星尾です。星尾に神光寺じんこうじという寺がありますが、当時は星尾寺という大きな寺で、京都との繋がりも深く、まさに一大拠点だったんです。

保田氏は南北朝時代、負けた南朝側の味方をして没落します。代わりにやってきたのがこれ

も湯浅一族で貴志川町あたりを治めていた貴志氏です。現在でも保田さんという姓は有田にはあまりありませんが、貴志（岸）さんはよく見かけますね。

湯浅氏略系図



↑もっと詳しく知りたい方はチェックしてください！
有田市観光協会公式サイト



08 明恵上人 みょうえしやうにん

明恵上人は鎌倉時代に活躍したお坊さんで、今の有田川町歓喜寺地区に生まれました。

この人の偉いところは、それまで一部の貴族などに限られていた仏教を、下々の庶民に広めようと尽力した点です。

昔の仏教は、人びとの願いを叶えるだけではなく、教育を行う学校でもあり、病気を診てもらえる病院でもあり、相談所、孤児院、DVシエルトなどなど、さまざまな役割を担っていたわけですが、その礎を築いた先人の内の一人なんです。

明恵上人はお釈迦様を想うあまり、2回インドへ行くこうと模索します。その当時インドへ行くというのは、今で言う月に行く位大変なことです。それを思い止まらせた場所が2回とも有田市内だったそうです。それぞれ星尾地区と宮原地区にいた明恵上人は、2回とも夢に春日明

神（奈良の春日大社の神様）が現れて、「インドへ行くのはやめなさい。」と言われ、思い止まったとのこと。面白いですね。

もしこの夢を見なければ、実際にインドに行き、日本には帰って来られなかった可能性が高いので、結果良かったと思います。

星尾にはインド行きを思い止まった場所に後の明恵上人の弟子が建てた卒塔婆（石碑）が建っています。他にも有田地方の明恵上人ゆかりの地に、弟子が併せて8箇所には石碑を建てていますので、ぜひ訪れてみてくださいね。



明恵上人

09 浄妙寺 じょうみょうじ

浄妙寺は宮崎町にある寺です。

建てられたのは平安時代の初めですが、仏像や彫刻など多くは鎌倉時代のもので、しかもどれも当時の最高水準で造られたと分かる素晴らしいものです。これは途中で寺が京都と繋がりのある者に支配されたことを意味します。おそらく、湯浅氏・保田氏との関係が深く、京都とのパイプを持つ明恵上人とも関係があったのではないかと思われます。

しかし、戦国時代、豊臣秀吉が全国を統一支配しようとするとき、有田も攻められ、浄妙寺の多くの建物も焼かれてしまったそうです。もったいないですね。

今は本堂と多宝塔という建物が残っていて、それらは国指定重要文化財となっています。そのたたずまいは、凜としていて、一見の価値があります。ぜひ見に行ってくださいね。



浄妙寺 多宝塔



浄妙寺 本堂

10 広利寺 こうりじ

広利寺は宮原町畑地区の山深い所にあるお寺です。

今は誰もいない小さなお寺ですが、ここのご本尊の十一面観音じゅういちめんかんのん（頭の上に11の顔がある観音様のこと）がとにかく素晴らしいんです。ふくよかで流れるようなお姿は見ていても飽きがきません。残念ながら、現在、広利寺にはこの観音様は安置されていません。県立博物館に保管されています。たまに展示されますので、その時はぜひ生で見てください！

実はこの観音様、元々は大阪のお寺にあったものなんです。その大阪のお寺がなくなつて売りに出されていたものを、宮原の宮本所右衛門みやもとしやうえもん（ひろとし）
広利さんという人が購入したのがこの十一面観音というわけなんです。だからこのお寺の名前も宮本さんの名前をとって「広利寺」と呼ばれるようになったと伝えられています。



広利寺 十一面観音



広利寺 本堂

11 みのしまじんじゃ
箕嶋神社

箕嶋神社は箕島駅の近くにある神社です。

元々この辺は川州かわすつまり有田川の川原だった所で、木が茂り「からすの森」と言われていた場所でした。

はじめ水主神社みぬしと呼ばれていたのが明治時代に箕嶋神社と呼ばれるようになったそうです。

箕嶋神社の境内にはいくつか祠ほひがあつて、様々な神様をまつっているのですが、その中の一つに「田中神社」という神社があります。

この田中神社にまつられている神様は、何と、田中善吉さんという箕島に実際にいらっしゃった方なんです！

田中さんはろうそくの原料を採るためのハゼノキやさつまいもの苗を九州から持ち込むなど、地元の産業の振興に力を入れた人です。

田中さんのおかげで仕事を持つことができた人などにとっては、田中さんは神様のような人

なわけで、本当に神社を建てて神様にしてしまったと言ふことです。面白いですね。



田中神社



箕嶋神社

12 得生寺・安生寺

得生寺は糸我町中番にある寺です。

5月14日に来迎会式という祭が行われます。

昔から「嫁をとるなら糸我の会式、婿がほしけりや千田の祭り」と言われていて、この糸我の会式は女の子が主役の祭で有名なんです。

主に地元の女の子達が25菩薩という仏様などに扮し、境内を練り歩きます。普通の祭のようにおみこしなどはなく、厳かな雰囲気祭です。

これは「中将姫」というお姫様が主人公の物語が元となっています。少々長いですが、その話を見ていきましょつか。

むかーしむかし、奈良の都に夢の上手



来迎会式

なお姫様がいました。あまりに夢が上手なので、まだ幼い女の子だけ「中将」という位を授けられたので、中将姫と呼ばれるようになりました。優しい父、豊成と母、紫の前と暮らす中で、中将姫は幸せでした。

ある日不幸なことに、母が突然亡くなってしまいます。悲しみにくれる娘を見て、いたたまれなくなった豊成は照夜の前という人と再婚します。しかしこれが完全に裏目に出ています。

照夜の前は何かにつけ才能のある中将姫に嫉妬し、意地悪をします。

さらには、豊成との間に豊寿丸という中将姫にとつての弟が生まれると、照夜の前は豊寿丸だけかわいがり、今まで以上に中将姫に辛く当たるようになります。

豊成が仕事で長期間家を空けていた桃の節句にとつとつ酷い事件が起きました。照夜の前はお菓子に毒を混ぜ、中将姫を殺そうとしたのです。ところが中将姫が食べるはずの毒入りのお菓子を、あろうことか豊寿丸が食べてしまい、

死んでしまいました。

照夜の前は自分の行いを棚に上げ、豊寿丸の死を深く哀しみ、そして最愛の息子の死の原因は中将姫が毒入りのお菓子を食べなかったからだ、と怒り狂いました。逆ギレとはまさにこのことです。



照夜の前はなりふりかまわず、伊藤春時という者を刺客に雇い、中将姫を抹殺しようとしています。

中将姫は着の身着のまま、命からがら、奈良から遠く名も知らぬ里まで逃げ落ちました。里の者に聞くとここは糸我という地のこと。

一方、刺客の春時は糸我の里で中将姫を見つけ、たものの、幼い姫をどうしても殺めることができず、姫の着物の端くれに自分の血を付けそれを姫が死んだ証拠ということにして奈良に戻ります。

奈良に戻ったものの、この頼りない証拠品で照夜の前をだませる自信の無い春時は、親友で

ある将鑑に相談しました。

将鑑の娘、瀬雲は、幼い頃中将姫と遊んだ仲で、面白いことに、姫と双子のように顔がそっくりで、二人が並んでいるとどっちがどっちかわからなくなるほどでした。

その瀬雲が父と春時の話を盗み聞きして、幼なじみの姫の危機を知りました。瀬雲は、姫と瓜二つだったからこそでしょうか、幼なじみだったからでしょうか、そこまでしなくても今の時代の人なら誰もが思う行動に出ます。「姫と瓜二つの私の首を見せれば照夜の前もだまされることでしょう。父上、先立つ不孝をお許しください。」と、父の前で自らの首を斬り死んでしまいます。深い悲しみと自責の念に駆られる将鑑と春時。

長い長い男二人の嗚咽。その後、長い長い沈黙。結局、瀬雲の遺志を継ぎ、春時は瀬雲の首を照夜の前に差し出します。照夜の前は、もう人間の感情を持つことはできず、一人惚けるしかできなくなりました。

仕事から戻ってきた豊成は、子どもが二人と

もなく、ただぼおつとしている妻がいるだけの家の有様に呆然とします。

豊成もまた深い悲しみと自責の念にかられます。春時から娘はとおく紀伊国糸我という地にいと聞き、娘に会いに向かいます。

糸我の雲雀山に身を隠していた中将姫は、豊成と再会をはたします。

でももう実の母には会えない。豊寿丸にも会えない。後から聞いたけど、瀬雲までもう会えない。中将姫は他の誰よりも深い悲しみの淵に沈み、自責の念に押しつぶされてしまいます。

そして奈良の当麻寺という寺で出家し、ひたすら蓮の糸で曼荼羅を織り上げていきます。自分のせいで命を落とした大切な人のために。

そして姫が29歳の5月14日、阿弥陀様と25菩薩に迎え入れられ、お浄土へ旅立っていききました。春時も出家し得生と名を改め、妻を奈良から呼び寄せ、妻も出家し妙生と名を改め、2人で糸我の地に小さな庵を結びます。

この庵が後の得生寺となったと言つてことです。

(体裁を整えるため、脚色を加えています。)

何と悲しい物語でしょう。

実はこの話、元々はもつとシンプルな話だったんですが、江戸時代に浄瑠璃や歌舞伎の題材に使われ、お客さんに楽しんでもらえるよう、どんどんストーリーがドラマティックに変わっていき、今の物語となったようです。

中将姫が織り上げたという伝説の曼荼羅は、奈良県葛城市の当麻寺にあります。得生寺にも曼荼羅が残されています。

安生寺の子安地藏

有田東大橋の南詰一帯を地藏堂と呼びます。有田みかん発祥の地とされるこの地の名前の由来になったお地藏様は、元々は安生寺の仏様でしたが、安生寺が廃寺となり、現在近くの得生寺にまつられています。

安産に御利益があるお地藏様で、安生寺では秘仏(姿を拝むことができない)でした。

13 立神社 たてじんじゃ

立神社は野地区にある神社です。

地元では「たてがみさん」と呼ばれ親しまれています。

有田川の流れが今と違い、ちょうど立神社にぶち当り、土をけずって淵（水深の深いところ）を作り、北の新堂の方へ流れていたと言われています。川の流れを受け止めるように「立石」という岩があり、これが立神社の名前の由来になったと言われています。

神社周辺の社寺林が、和歌山県の自然環境保全地域に指定されていて、ホルトノキ、スダジイ、バクチノキ、ウバメガシなど貴重な植物群落が見られます。



立神社 本殿
左奥にヤシの木のような形のビンロウが見えます。



ウバメガシ
和歌山県の木。備長炭の原料になる。



ホルトノキ
古い葉が赤くなる。



ビンロウ



バクチノキ
幹の皮が所々むけて赤く見える。



スジダイ
代表的なドングリの木



14 もちづき たざ えもん
望月太左衛門

有田川の堤防沿いを走る国道480号は、新堂の前山家具あたりからJA箕島支所あたりまで、大きくS字型にカーブしています。

この辺は「新堂の横堤」と呼ばれ、昔から堤防がよく切れて水害に悩まされてきた場所です。江戸時代、殿様に頼まれこの辺の堤防の強化を任されたのが、望月太左衛門という人です。

太左衛門は、二度と決壊しないような、頑丈な堤防を作ろうとしました。

しかし、その結果お金をかなり使ってしまった、なんと、太左衛門は責任を取って家族と共に自殺に追い込まれてしまいました。

今の時代では考えられませんが、当時は堤防を築くときに、堤防がうまく完成し、末永く機能するよう、人柱ひとしらといって人の命を捧げたのです。奇しくも、太左衛門自身が人柱となった形になったのです。

とにかく、この横堤はその後箕島を水害から守り続けたんです。

ちなみに今の横堤は7・18水害後に新しく築かれたものです。



15 ありだ 有田みかん

有田市は全国でも有数のみかんの産地なのは、これを読んでいる人はみんな知ってることだと思います。今のおいしいみかんが栽培されるようになるまで、いくつかの歴史と謎があります。

有田にみかんが最初に持ち込まれたのは、いくつか説がありますが、その多くは糸我を起源としているようです。そして最も有名な説が、糸我の伊藤孫右衛門いとうまご えもんという人が今の熊本県の八代やしろというところからみかんの苗木を持ち帰ったという説です。

今でも、糸我に有田最初のみかんの木の直系の子孫が、接ぎ木つぎきして受け継がれています。（県指定文化財）

江戸時代となり、徳川頼宣が紀伊国藩主になりました。頼宣は領地内の産業振興に力を入れ、みかんの栽培も広まりました。当時みかんはとても貴重で、一籠半で一両（十万円以上）の値

で取引されるほどでした。まさしく高級スイーツですね。

実は、有田最初のみかんは今のみかんとは違う品種でした。本みかんほんかんとか、小みかんこみかんと呼ばれ、一回り小さく、タネがありました。今、主に栽培されている温州みかんうんしゅうは、江戸時代にもありました。タネがないのが「子供ができず不吉だ」と嫌われました。明治時代になり、大きくて、タネがなく食べやすい温州みかんが広まってきました。



最初の有田みかんの木（接ぎ木したもの）

16 紀伊国屋文左衛門きのくにやぶんざえもん

「沖の暗いのに白帆しろほが見える あれは紀伊国みかん船」

これは地元有田で昔から唄われている、みかん摘み唄（江島節）の一節です。

江戸時代の初め、嵐の中を紀伊国から江戸へみかんを運び、大もうけをしたという紀伊国屋文左衛門。その様子を唄ったものです。

紀伊国屋文左衛門は謎の多い人で、出身地も色々と説があつて分からないほどですが、誰もやらなかったことをやり、ここしかないタイミングでやるという商売の天才だったことは間違いないようです。

また、有田みかんの名を全国に広めた第一の功労者と言えます。

このみかんで得たお金で紀伊国屋文左衛門は材木の商人となります。ここでも色々とアイデアを駆使して巨万の富を築いたといえます。

一代で築いた紀伊国屋文左衛門の材木屋も、早々に閉めてしまい、その後の紀伊国屋文左衛門の生涯も様々な説があつてよく分かっていません。

ですが、彼の振る舞いは、当時の江戸っ子の心に深く刻まれ、半ば伝説となつて今でも人びとの心を揺り動かしています。



みかん船（一石船）の模型（有田市郷土資料館）

17 矢櫃^{やびつ}

有田市の一番西にある矢櫃地区。小さな入江の背後の急斜面にギッシリと建物が建っているその姿は、どこか異国情緒が漂います。

この矢櫃地区に人が住み始めたのは、江戸時代、紀伊国初代藩主、徳川頼宣公^{とくがわのぶ}が、有田の沖を怪しい船などが通ったら、のろしを上げて和歌山城へ知らせる役割をさせるため、今の串本町から夫婦二組を連れてきたのが初めです。この夫婦二組は役割を与えられた代わりに、矢櫃の人びとは代々税金を免除されてきました。（今はもちろん払っています。）

ということで、矢櫃の人びとは徳川頼宣のことを大変敬ってきました。

頼宣をまつる「南龍神社」^{なんりゅうじんじや}を建て、正月明けの九日（現在は1月の第2日曜日）に頼宣公を偲^{おも}ぶまつり「お日待^{ひま}ち」を行います。

お日待ちというまつりは他の地域にも残って

いますが、どれも夜通し朝まで宴会をする点が共通しています（だからお日待ちという名前なんです）。矢櫃のお日待ちはその宴会が明けた次の日の朝、頼宣の墓がある下津の長保寺^{ちようほうじ}へお参りし、大の甘党であった頼宣のために、小豆をお供えする点が面白いですね。



矢櫃集落

18 くまの 熊野古道

熊野古道は熊野三山（本宮大社・速玉大社・那智大社）をゴールとする道で、古くから熊野三山の御利益を求める人が歩いた信仰の道です。古くは京都の皇族貴族が足繁く参拝し、後白河上皇はなんと33回も参拝しています。

一般庶民にも広く熊野詣（くまのもうで）が広まったのは室町時代からで、「蟻の熊野詣」と表現されるほど多くの人が熊野を目指しました。現在も昔の状態がよく残されていて、一部は世界遺産に認定されています。有田市も熊野古道が通っています。残念ながら世界遺産にはなっていないませんが、道沿いにはいくつかの史跡が残されています。

その一部を紹介していきます。

なごいさかみおうじ
蕪坂峠王子
やまぐちおうじ
山口王子

いとがおうじ
糸我王子

熊野古道沿いには○○王子と名前のついた神社や神社跡がたくさんあります。王子と言うけれど別に王子様とは関係ありません。熊野古道のゴール地点、熊野の神様を親（王）とすると、このたくさん小さな神社はいわば子ども（王子）、ということではないでしょうか○○王子と呼ばれるようになりました。



糸我王子



山口王子



蕪坂峠王子

有田市にはこの3つの王子社があります。

熊野に詣でる人々は、道すがらこの小さな神社に参拝しました。それは一つに道中の無事を祈るという目的があつたと思います。

もう一つ、王子社に参拝する理由としては、小さな目標設定の意味があつたんだと思います。この小さな神社はだいたい数km歩くことにあるので、一日に何社か参拜することが出来ます。熊野という大きな目標は歩いてても歩いてても中々近づいているという実感がわきませんが、王子社に参るたびに一步一步着実に進んでいるという実感を感じることができたのではないのでしょうか。

爪書地蔵

弘法大師が
岩に爪で書いた
と言い伝えら
れています。

お地蔵様の



爪書地蔵

ほか、阿弥陀様も書かれています。



爪書地蔵本堂

伏原の墓

車も電車もない昔、熊野詣は過酷でした。何日もかけて、いくつも峠を越えて歩かねばなりません。ですの
で、志半ばで行き倒れになる人



伏原の墓



爪書阿弥陀様

が絶えませんでした。そうして亡くなった人を
弔ったのが伏原の墓です。墓石を見ると、多様
な地名が書かれています。各地から多くの人が
熊野を目指していたのがうかがい知れます。

札場地蔵・渡し場

宮原橋もない昔、有田川を渡るには船を使っ
ていました。

宮原橋と天神さんの間に渡し場があり、川が増
水などで渡れない時は、近くの札場地蔵に札が立
ち熊野詣の人達に知
らせていました。



札場地蔵

いちりづか
一里塚
得生寺のすぐ近くに、こんもりと土が盛られ、
そこに松が植えられています。これは一里塚と
言って、熊野古道沿いに一里（約4km）ごとに
作られています。今では
ほとんど残っ
ていない貴重
な史跡です。



天神さん



一里塚



渡し場跡

糸我峠

ここは有田市内の熊野古道でも一番昔の雰囲気が残されている所です。急な峠を登りやすくするため、右に左に何回も折れた道は「七曲がり」と呼ばれる所で、この部分は国の史跡になっています。

峠にはかつて茶屋があり、名物の「みかん」などを旅人に売っていました。

この峠を越えるとそこは湯浅町になります。

※得生寺・雲雀山はP15、糸我稻荷神社はP8、太刀宮・宮原神社はP31をご覧ください。



糸我峠



紀伊国名所図会

19 蚊取り線香 かとせんこう

蚊を退治する時、今は色々な方法があります
が、一昔前まではもっぱら蚊取り線香でした。
今でもバーベキューだとか屋外での蚊対策によ
く使われますね。

実はこの蚊取り線香が生まれたのは有田市な
んです！

明治時代に山田原の上山英一郎さんたちが今
の渦巻き型の蚊取り線香を発明しました。

蚊取り線香の原材料に使用されるのは除虫菊と
いう白い菊のような花で、花の中に多く含まれるピ
レトリンという成分が蚊を退治してくれるんです。

上山英一郎さんたちは、まず日本に渡来して
間もない除虫菊を育てるのに大変苦労しました。
当時誰も育て方を知らなかったので試行錯誤を
繰り返したんです。幸い有田の地は雨が少なく、
日本の中では育てるのに向いていたので、やが
て除虫菊の大量栽培に成功します。

その後、除虫菊からピレトリンをうまく抽出す
る方法であるとか、いくつもの壁を乗り越え、と
うとう蚊取り線香が完成、販売が開始されました。

明治二十三年に発明された当初の「棒状蚊取り線
香」は、その名のとおり仏壇で使う線香のような棒
状の形をしていました。これだと効き目を持続させる
ためにいくら長くしても40分くらいしか持たず、ま
たあまり長いと倒れて火事になる危険もありました。

あるとき、英一郎の妻ゆきさんが、とぐろを
巻いている蛇を見てアツと思いつき、渦巻き型
の蚊取り線香が生まれたそうです。これで効き
目は7時間も持つようになり、火事になる危険
もぐんと減りました。

ゆきさん、グッドジョブですね。

明治時代の終わりにかけて、有田市内で数社
の蚊取り線香会社が設立されました。

現在是有田市内では、上山
英一郎が設立した大日本除虫菊
(キンチョー)と、ライオンケミ
カルの二社が製造しています。



20 愛宕山 あたごやま

箕島駅の裏に連なっている山のうち、鉄塔の建っている山が愛宕山です。標高191.7mの山で、箕島の人にとって一番身近な山となっています。

愛宕は「あたご」と読み、火事除けの神様である愛宕神社が山の中腹に鎮座しています。

箕島郵便局の角から北へ進み、愛宕山へ向けて道を登っていくと、石の仏像をまつた祠ほこらがいくつも連なっている山道に続いていきます。

これは愛宕山八十八箇所と呼び、祠は八十八あります（八十八箇所目は愛宕神社）。これは四国のお遍路へんろさんのミニチュア版です。

お遍路さんとは？

弘法大師（空海、お大師様）が四国で修行した際のゆかりの寺が八十八箇所あり、その寺を巡ってお参りすることを遍路といい、親しみを込めてお遍路さんと言ったりします。お四国さんとか、四国八十八箇所と言ったりもします。

お遍路さんは、今でこそ手軽に車や電車で行けるようになりましたが、昔はもちろん四国まで船で渡る必要があるし、山あり谷ありの険しい道を歩いて四国を一周するという大変過酷なものでした。

そこで身近な所にお遍路さんを模した八十八箇所の祠を作り、仏像をまつたミニチュア版が西日本を中心に作られました。その一つがこの愛宕山八十八箇所です。

手軽にいけるようになったとは言え、今でも中々四国一周はハードルが高いですよ。愛宕山八十八箇所の仏像は小さいけれど「おたましい」が込められているはずですので、お大師さんのご利益にあやかりたい時は是非ここに参ってみてください。



愛宕山八十八箇所
第八十八番「愛宕神社」

21 ありだし 有田市の鉄道 てつどう

有田市に鉄道がやってきたのはいつのことでしょうか。

一番最初にできた駅は箕島駅で、1924年（大正13年）の事でした。

次の年の1925年（大正14年）には紀伊宮原駅ができ、という風に、当時は、和歌山方面から南へ順番にどんどん駅が作られていきました。

遅れること10数年、初島駅は1938年（昭和13年）に作られました。

実は、鉄道設置計画では、下津から峠を越え宮原方面へ通る予定だったそうです。

その話を聞いた箕島の勇士達が切腹も辞さない覚悟で陳情を重ね、今の路線となったそうです。すさまじいですね。

箕島駅ができた当初、大阪方面に行くには終着駅の和歌山市駅から南海鉄道に乗り換えてな

んばへ行く必要がありました。それでも当時の人々は、それまで徒歩等でしか行けなかったんですからかなりの進歩です。

ちなみに当時の終着駅、和歌山市駅へ行くのに途中の駅はたった5つ！快速並みの駅数ですね。

和歌山市 終点

和歌山（今の紀和駅）

東和歌山（今の和歌山駅）

紀三井寺

日方町（今の海南駅）

加茂郷

箕島



22 東亜燃料

初島の海沿いに広がる大きなタンクと工場。

現在は（令和2年6月から）エネオス株式会社和歌山製油所という名前になっていますが、元々は東亜燃料工業和歌山工場といい、地元でも「とうねん」と呼ばれ親しまれています。

工場が操業したのは昭和16年。第2次世界大戦で真珠湾攻撃がなされた年でした。そこで、東燃の工場は主に軍用飛行機の燃料を生産するために作られたのです。

やがて日本の本土に連日空襲が行われるようになると、東燃の工場も3回爆撃を受けました。特に昭和20年7月28日、B 29の大編隊の爆撃により、壊滅します。

戦争が終わり、東燃はアメリカの企業と手を結び再びスタートします。和歌山工場は、今までのノウハウを活用し、付加価値の高い飛行機の燃料や潤滑油などを主に生産しています。



東亜燃料、現エネオス 和歌山製油所の夜景

この冊子の編纂中である令和4年1月25日に、ENEOS（株）から令和5年10月をめどに和歌山製油所の操業を停止するという発表がありました。長年有田市の基盤産業として地域経済に果たした役割は大きく、和歌山製油所の操業停止が有田市に与える影響ははかり知れません。

令和4年3月現在、今後の工場跡地や雇用確保等の様々な問題について、官民一体となり、あらゆる方法を模索しています。

23 みやらはらじんじゃ 宮原神社、かすがしや 春日社、たちのみや 太刀宮

宮原神社って、よく考えたら変な名前です。

宮原神社という名前は、宮原にある神社という意味です。

宮原という地名は、お宮（宮原神社）がある原っぱという意味です。

あれ、ニワトリが先か、卵が先かみたいな事になってますね。

実は宮原神社は昔別の名前の神社（八幡社）だったんです。

明治時代に今の宮原神社という名前になりました。



宮原神社

春日社

そもそも、昔は八幡社以外にも宮原に神社があったので宮原の宮はどの神社を指しているかははっきりしません。ですが、その中でも宮原神社以外で最も有力な宮原の「宮」候補が「春日社」です。春日社は、鹿で有名な奈良の春日大社の系列神社です。春日大社は、元々は藤原一族が自分たち一族のために作った神社なんです。宮原は平安時代の昔、藤原氏の関連施設（勸学院^{かんがくいん}）の持つ土地で、皇族が熊野古道を通る時そこに立ち寄ったといわれているので、関連があるかも知れません。

また、明恵上人（コラム8参照）が宮原に立ち寄った時、春日大社の神様が夢の中に出てきて、「インドに行くのはあきらめなさい」とお告げを受けたという逸話が残っています。これも春日社と関連があるかも知れませんね。

このように昔の逸話が残っている春日社ですが、明治時代に神社や寺が大規模に整理された際、宮原神社に合併されました。現在は宮原神

社の一角に小さな祠が残っています。

太刀宮

宮原神社では4月に剣道の奉納試合が行われます。周辺の剣道クラブの子ども達が集まり神様の前で試合をするのです。そのせいか、宮原は剣道が盛んなイメージがあります。



太刀宮（宮原神社内）
奉納された刀が見えます。



春日社（宮原神社内）

なぜ宮原神社で剣道の試合をするのかというと、宮原神社の前身である八幡社の神様が、戦いや勝負事の際によく参られることが多い神様でもあるのですが、境内に太刀宮という神社があり、必勝祈願等で刀（もちろん模擬刀です）を奉納する風習が元となっていると思われます。

この太刀宮、昔有田地方を治めていた宮崎一族の一人、宮崎定直（みやざきさだなお）にまつわる話が残っています。

昔、宮崎定直が大坂冬の陣に参戦した帰り、蕪坂峠（なぐさかとうげ）（下津と宮原の境目）を越えた所で、故郷の風景に安心したのと、戦の疲れがたまっていたのとで、（昔は蕪坂峠の近くにあった）太刀宮の前で眠ってしまいました。その間に定直を討ち取ろうとする追っ手が、定直に追いついてしまい、眠る定直を襲おうとしました。

その間定直は夢を見ていました。今の状態と同じ、太刀宮で寝ている夢です。夢の中でも追っ手に襲われますが、定直は金縛りにあって動けません！絶体絶命のピンチ！と、その時、定直

の刀が勝手に動き出し、あれよあれよと追っ手を切り倒してしまったのです。そのあと、刀が力尽きたように動かなくなり、真つ二つに割れてしまった所で定直は目が覚めました。

定直がめざめた後に見た風景は夢と全く同じでした。切り倒された追っ手の死体、そして真つ二つに折れた自分の刀。

そこで定直は、現実でも刀に助けてもらったと悟ります。

折れた刀を手にとった定直は、何気なく折れた場所を合わせました。すると、ふしぎなことに折れてしまったはずの刀の折れ目が繋がり、すつかり元どおりになったのです。それから、この刀



太刀宮（宮原町畑）

は「折継丸^{おりつぎまる}」と呼ばれるようになり、太刀の宮に奉納されました。

24 鵜飼^{うかい}

鵜飼とは、鵜^うという鳥を調教して、夜にたいまつ^{たいまつ}の火に寄ってきた魚（主に鮎^{あゆ}）をとってこさせるという伝統的な漁の方法です。

今は休んでいますが、有田川でも平成の後半頃まで夏の風物詩として鵜飼が行われ、多くの観光客が訪れていました。

普通、鵜飼は鵜匠（うししょう）と呼ばれる鵜をあやつる人が、船に乗ってたくさんの鵜を同時にあやつって漁を行いますが、有田川の鵜飼は、鵜匠が川に直接入って一羽の鵜をあやつります。

これは徒歩^{かち}つかいという古い方法で、現在この方法が残るのは有田川と山梨県の笛吹川^{ふえふきがわ}という所の2箇所しかないそうです。

有田川の鵜飼は、毎年鵜を新たに捕らえ、調教し、シーズンが終わると自然に帰してしまいます。また、一年中何かしらの作業が必要です。

再開するめどは今のところ立っていません。



25 漁業ぎょぎょう

宮崎町辰ヶ浜の箕島漁港は、太刀魚（タチウオ）の漁獲量日本一を誇ります。

太刀魚は、その名前のとおり刀のように銀色に輝く細長い魚で、また歯が刀のように鋭いのでうっかり噛まれないように注意しないといけません。味は淡泊で、煮てもよし焼いてもよし、新鮮なものは刺身にしてもよし！食べたことない方は是非ご賞味あれ。

太刀魚は海の底の方に住んでいる魚なので、底引き網という海底の魚をとるための網で漁をします。

箕島漁港で一番目立つ黄色の船は、「うたせ」と呼ばれていて、太刀魚等をとる底引き網漁に使用されています。

ちなみに「うたせ」とは、元々は帆かけ船のこと、エンジンがなかった時代は風の力で網を引いて漁をしていました。



うたせ船



八角網

宮崎町逢井地区や高田（千田漁港）では「かくあみ八角網」という定置網を使って漁を行います。

クモの巣をヒントに編み出されたという八つの角がある網を海にしかけて、中に入り込んで出られなくなった魚をとります。

とれる魚は様々ですが、魚に傷が少ないのが特徴なので、とれたてを刺身にして食するのが最高です！

26 浄念寺と小説「有田川」

和歌山県出身の作家、有吉佐和子さんは、地元和歌山を題材にした小説を多く書いています。その中でも、「紀の川」「日高川」「有田川」は俗に「川もの」と呼ばれ、激動の時代を生きた一人の女性の生きざまを、雄大で時に厳しい災害をもたらす川の流れになぞらえ、生き生きと描き人気を得ました。

「有田川」の主人公、千代も明治・大正・昭和と激動の時代を生きます。そして、明治の水害で2度も流されるという数奇な運命をたどります。そしてあの7・18水害でも・・・詳しくは読んでみてください。

昔の有田弁が飛び交う会話。登場人物は架空ですが、有田の地名や祭りなどは実際のもので、有田の歴史を学ぶこともできます。

図書館にも置いてありますよ。

ところで、この「有田川」に象徴的に登場する木、「人助けのビャクシン」は、宮原町滝川原の浄念寺に実在する木です。

小説の中では、明治の水害で流された千代が、このビャクシンの木に引つ掛かり命拾いするのですが、現実の世界でもこのビャクシンの木は水害のたびに流された人を引つ掛けて助けてきたので「人助けのビャクシン」と呼ばれています。あと、小説では小さな御大師様が登場します。

水害で行方不明になるのですが、千代が泥の中から見つけ出すのです。これも浄念寺に実際に存在する御大師様です。



浄念寺「人助けのビャクシン」

有田市の地名について

有田市の地名

地球上のあらゆる場所には、その場所を表すために名前がついています。これを地名と言います。

住所は、大きな場所を表す地名から順番に小さい場所を表す地名が並んでいます。例えば、有田市役所の住所は「和歌山県有田市箕島50番地」です。有田市役所は、和歌山県の中にある、有田市の中にある、箕島という所の、50という番号（番地）が振られた場所に建っているとなります。

自分の住んでいる家にも住所があつて、地名が並んでいますよね。この地名、なんでこんな名前になったんだろうって思ったことはありませんか？実は、最近作られた地名を除いて、地名のほとんどはなぜその名前になったのかはつきり分かりません。

古い書物に地名の由来ゆらいを書いていることがあります。言い伝えであつたり、推測すいそくであつた

りすることがほとんどであてにならないことが多いのです。

でも、様々な書物を調べたり、全国にある似た地名の地形や歴史を比較したりすると、ある程度確信を持って推測することはできます。

ここからは、有田市内の地名の由来を書きます。古い書物に載っている推測や言い伝え、そして全国の地名を比較した末の推測も載せています。100%の正解はないですが、参考にしてみたいと思います。

そして、興味のある人はぜひ地図を手に調べてみてください。正解がないからこそその面白さがありますよ！

① 有田ありだ

「有田市」

「有田」には「有田市」と「有田郡」がありますが、「有田市」の方は1954年、箕島町みのしま、保田村やすだ、

宮原村、糸我村^{いとが}という4つの町村が合併するときに、有田郡という地名から名前を採用し「有田町」が誕生し、その後「有田市」となりました。その後初島町が1962年に合併しました。

「有田郡」

有田郡は昔、「あて郡」と呼ばれていました。それが天皇家に安殿^{あて}という名の皇子様がおられたので、重複を避けるため、恐れ多いので、「あて」の地は「ありだ」と名前を変更したとされています。

ところで、この安殿皇子は、大人になり、806年に平城天皇^{へいぜい}となりました。この806年に「あて郡」は「ありだ郡」に名前を変更しました。そして同じ806年、安殿皇子の母親、藤原乙牟漏^{ふじわらのおとむろ}が「あて郡」から「ありだ郡」に名称が変わったばかりの地の西の端、今の宮崎町に浄妙寺^{じやうめうじ}を建てさせたと言われています。

この「あて」という名前を通じた天皇家と有田の奇妙な繋がりは、事実かどうか怪しい所も

あります。そもそも藤原乙牟漏は790年に亡くなっているのです、死後16年も経って浄妙寺が建ったことになります。怪しいですね。しかし、この頃に「あて郡」から「ありだ郡」に名称変更したのは事実で間違いないでしょうし、天皇家と有田の間で、詳細は分からないけど何らかのエピソードがあつたのは間違いないでしょう。

そもそも、なぜ平城天皇は幼少期に安殿皇子と名付けられたのでしょうか？

昔、皇族など身分の高い家で子供が生まれたら乳母を付けることがよくありました。乳母は文字どおり実の母親の代わりに乳を与えたり、その子供の教育全般を担っていました。いわば育ての親です。

平城天皇が生まれた当時、その乳母の出身地を幼名に付けると言うことがありました。そのルールから、平城天皇の乳母が「あて郡」出身だったのではないかと推測できます。

実際、平城天皇の次の天皇、嵯峨天皇は、幼

有田市の地名について

少時の乳母が今の愛媛県新居浜市の辺りの「神野郡」という所の出身だったので、幼名を賀美能親王と名付けられました。

そして有田と同じく、恐れ多いと言うことで神野郡は新居郡と名前を変えたそうです。

でも、そうなると天皇の乳母の出身地の地名がどんどん変わっていくことになりますよね？実際にそういう声があったようで、嵯峨天皇の賀美能親王より後にこのルールは廃止されました。

嵯峨天皇の乳母、賀美能宿禰はその後都の要職に就き、退職後、旧神野郡、新居郡と名前が変わったふるさとの地に、正法寺という大きなお寺を建立したそうです。

そうなると有田の浄妙寺も、藤原乙牟漏が建立したのではなく、ひょっとしたら平城天皇の乳母がふるさとに建立したお寺なのかも知れませんね。

ちなみに嵯峨天皇の母親も藤原乙牟漏、つまり嵯峨天皇は平城天皇の弟です。

「あて」と言う地名ですが、その由来は分かりませんし、元はどこだったかもはっきりしません。万葉集に「足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずもあらかなむ帰り来るまで」という短歌が残されています。

「あて」を通過し「いとか」つまり今の糸我の桜を見て、帰りにも散らんと残つていて欲しいなと願う歌なんです。が、これから、「あて」という所は糸我の手前にある地名だと言うことが分かりますね。この短歌を歌った人が、奈良方面から熊野古道を通り、田辺方面へ向かっている人だと仮定すると、「あて」の地は、今の宮原町あたりにあったんじゃないかと推測できます。

つまり、「あて郡」は今の宮原町あたりにあった「足代」という場所から名前を採用したと推測を広げることができますね。

そうだとすると、「有田市」は「有田郡」から命名、「あて郡」は今の有田市内にあった「あて」から命名、と、1000年以上の時を経て地名

が巡っていて面白いなと思います。

「あて」の地名の由来はそれこそはつきりしません。宮原町に「あて」があつたとして、「宮原町畑（HATA）」と「あて（ATE）」で発音が近いので、宮原町畑に由来を求める人もいます。民俗学のレジエンド、柳田国男（やなぎたくに お）さんは、「当沢（あてりさわ）」という地名について書き残しています。そこで柳田さんは「あて」とは木材の生育の悪い所を指し、「当沢」は当たりの悪い場所と述べています。

それから「あて」の地は当たりの悪い場所を指すのでは？と推測できますが、宮原つてどっちかっていうと当たり良いですし、柳田さんの言うことを宮原の地にそのまま当てはめるのはちよつと違和感が残ります。

「ありだ」の地名の由来ですが、一般的に、「有田川が荒れた川だから」有田となったという人が多いです。確かに昔の人々も有田川の洪水に苦しめられたことでしょう。でも、荒れた川な

のは何も有田川に限らず、紀の川だつて日高川だつて充分に荒れる川です。特別に有田川が荒れていた事は無いと思います。

実は806年に「あて郡」から「ありだ郡」に名前が変わる前から「ありだ」と言う地名の痕跡は残っていて、「あて郡荒田（あたらた）」と言う村名が出てきます。

「荒い」「新しい」は同じ語源で、実際、昔新しく作った田んぼのことを「新田（あらた）」と呼ぶことがあつたようで、「あて郡」のどこかにあつた「あらた村」は新しく田んぼが作られた村だつたと推測できます。今でも「新町（しんまち）」とか「泉北（せんぼく）ニュータウン」とか、新しく作られた町には新しいと言う意味を込めることがあります。それと同じような感覚で名付けられたのではないのでしょうか？

806年に「あて郡」の名前を変えなければいけないときに、この「あらた村」の名前が採用された。実際、郡の名前を「あらた」めるんですから、ピッタリの名前じゃないですか？先

ほど書いた神野郡から新居郡の名前変更も「新」の文字が入ってますし、新しい名前を付けようという意識があつたんだと思います。以上が「有田」の由来じゃないかと思っています。そして「あらた村」はどこにあつたかですが、ここからは全くの私の推測です。

平城天皇とその乳母は、自分たちのために「あて」の地が名前変更されることに心が痛みました。せめてものつぐないにこの地にお寺を建ようと考えました。「あて郡」で最も寺を建てるのに適した場所を探し、行き着いたのが今の宮崎町で、平城天皇が即位したその年に、浄妙寺を建てました。そして、そこは「新田」が広がる地、つまり、当時「ありだ」と呼ばれる地でした。

② 椒はしかみ（初島の昔の呼び方）

初島地区は、昔は椒（はしかみ）と呼ばれていました。椒、つまり山椒（さんしょう）もし

くはシヨウガがたくさんはえていたからと言われている。

でも、私は初島は特別山椒やシヨウガが育つのに適した土地とは思いませんし、違う由来だったと考えています。以下推測です。

椒は元々有田郡ではなく、海部郡あまの村でした。海部郡は和歌山市や南海市の海岸沿いに広がる地域で、中心地は湊村みなと、今の紀ノ川の河口付近でした。湊村から見ると海部郡の一番遠くて端っこの土地、この地を超えようとそこは海部郡ではなく有田郡です。なので端上（はしかみ）村：椒村となりました。

ちなみに、全国に橋上とか階上、波路上、始神など様々な漢字の「はしかみ、はじかみ」地名がありますが、その多くは中心地から離れていたり、隣の地域の境界線近くにあつたりします。

③ 初島^{はつしま}

椒村が町に昇格したとき「初島町」と名前が改められ、それ以来、椒の地は初島と呼ばれるようになりました。

なぜ初島なのかというと、地ノ島と沖ノ島が「浦の初島」と呼ばれていたことに由来するんですが、そもそもなぜこの二つの島が「浦の初島」と呼ばれていたのか？ 以下推測です。

奈良京都の人々が紀伊国^{きのくに}を訪れて、熊野方面^{くまの}に向かうとき、この地ノ島・沖ノ島が、最初に出会う有人島なので「浦の初島」と呼ばれるようになった。

「浦の初島」の「浦」は、漁業を営む人が住む村とかそういう意味です。

これを読んだ人の中には、和歌山市に友ヶ島があるじゃないかとつっこむ方がいるかも知れ

ません。

確かに、友ヶ島の方が浦の初島より北側にあって京都奈良の人が最初に出会いそうなもんですが、当時の人にとつて、友ヶ島は淡路島と同じく阿波（徳島のこと）へのルート、「阿波路島」の一つだったので、初島扱いされなかったんじゃないかなと思います。

ちなみに、伊豆^{いず}にも「初島」という島があつて、これも東京方面から見て初めて出会う位置にある有人島です。

④ 港町^{みなとまち}

この地名はわざわざ説明しなくても分かりますよね。そう、「港町」は港町だから港町と呼ばれているんです。

ただ、昔は「港町」ではなく「北湊^{きたみなと}」と呼ばれていました。南の方、今の辰ヶ浜^{たつがはま}も港町なので「北湊」です。江戸時代に有田みかんが全国

有田市の地名について

に出荷されるようになり、「北湊」はみかん出荷の拠点として大いに発展しました。

みかんの出荷が鉄道そしてトラックに移り変わり、「北湊」からみかんが出荷されなくなった今でも「港町」の称号は辰ヶ浜ではなく港町に与えられています。

⑤

箕島 みのしま

官公庁などが集まる有田市の中心地ですが、名前の由来は「昔箕みののような形をした島だったから」とか、「水に苦しめられた島『水の島』だから」とか諸説ありはつきりしません。以下推測です。

箕島は、昔、山田原から線路近くを東西に流れる現在よりも川幅の広かった瀬戸せとがわ川と、有田川に挟まれた細長い半島状の地形をしていました。その形状が蛇のように細長い島だったので、

「巳（み）の島」と呼ばれるようになりました。

そして推測2

箕島の地は昔から洪水に悩まされてきました。そこで人々は水の神様をまつろうと言うことになり、川州（かわす）という所に水主（みぬし）神社をまつりました。やがてその神社は、烏（からす）の森の箕嶋（みのしま）神社と呼ばれるようになり、神社周辺の集落も箕島と呼ばれるようになりました。

地名の由来がどうであれ、箕島は水に苦しめられてきたのは間違いないと思いますが、全国に船で渡り歩く商業の町として栄えてこれたのも、水のおかげとも言えます。

だから私は、箕島は「水の神様である蛇のような形をした、水に愛されてきた町」なんだなあと思っています。

⑥

宮崎^{みやざき}

この地名も、わざわざ説明しなくても由来の想像が付きましますね。

お宮（立神社か須佐神社）の先にある土地だからでしょう。

昔はもつと広範囲、有田市の西半分を宮崎と呼んでいました。

そしてその宮崎を治めていた一族が宮崎氏で、今も野地区や新堂地区に宮崎さんが大勢住んでいますね。

宮崎地区は、海に飛び出た岬のような形をしています。

22ページの話にもあるように、江戸時代の和歌山藩の防衛上重要な土地であったのは、その海に突き出た地形だからでしょう。

⑦

辰ヶ浜^{たつがはま}

「辰ヶ浜」、小学校名は「田鶴」と書きますが、この地名の由来もよく分かっています。昔この辺の田んぼに鶴がよく舞い降りたからという説は聞いたことがあります。

近くの立神社の由来に、昔は有田川がこの神社の岩にぶつかっていたからその岩が「立岩」と呼ばれ、立神社となったとあります。

河口には潮の流れによって、川の流れをせき止めるかのような細長い砂州^{さす}ができることがあります。和歌山県では「和歌川（旧紀の川）」「切目川」「富田川」「太田川」「熊野川」で見られます。（グーグルマップ等でぜひ見てみてください。）

有田川にも明治時代まではこのような砂州が辰ヶ浜から港町方面に伸びていました。

辰ヶ浜の根元、宮崎町保育所の裏に飛龍神社^{ひりゅうじんじや}があります。

以上のことから、私はこう推測します。

有田市の地名について

有田川に立ちはだかる龍のような形をした浜、つまり「立てが浜」から「辰ヶ浜」となりました。

昔の漁船、うたせ船はもちろんエンジンはなく風を帆に受け移動しましたが、天然の防波堤である「辰ヶ浜」の裏に停泊し波をよけていたと思われます。そして夜の陸風で出港し、昼の海風で帰港するを繰り返していたんでしょうね。

⑧ 小豆島あずしま

宮崎町の東半分を小豆島と呼ぶことがあります。「あずしま」と読みます。和歌山市にも小豆島地区があり、読みも「あずしま」です。香川県にある小豆島は「しょうどしま」と読みますが、昔は「あずきじま」と読んでいたようです。

どの小豆島も、特段、小豆（あずき）の採れる土地という訳でもないです。

土地が崖崩れ等で崩壊した所を「崩岸あず」と呼ぶそうです。

有田の小豆島も和歌山市の小豆島も川沿いにある、洪水等で水かさが増すと川の中州の形がころころ変わるような場所にあります。

この、川の水でしよつちゅう形が崩れるような中州のことを「崩岸島あずしま」、つまり、その中州のある土地一帯を「小豆島」と呼ぶようになったと思われます。

ちなみに香川県の小豆島は瀬戸内海に浮かぶ島でころころ形が変わるようなことはありませんが、崖崩れでできた扇状地が多くあり、そこに人が住んでいるので、ここも「崩岸島」がその名の由来かも知れません。

⑨ 古江見こえみ

昔、有田西部の宮崎荘内に、古江見寺という寺があり、その周辺を古江見と呼ぶようになったと言われています。

ではなぜ古江見寺という名前の寺ができたのか、よく分かっていませんが、寺名は重複することが多いにもかかわらず、全国に同じ名前の寺はどうもないように思います。有田オリジナルの寺名の可能性大です。

古江見に現在もある安養寺あんようじという寺は、元々この古江見寺のお堂の一つだったのですが、その寺の古文書には古江見寺の名前は出てくるものの、残念ながら古江見の名前の由来までは書かれていません。

以下想像です。

古江見地区の南と東側は山に囲まれ、北は現在よりも川幅が広がったと思われる有田川が流れていたで、昔の人は古江見寺・古江見地区に行くのに山か川を越えていかないとたどり着けなかった。

なので、「越え水寺」もしくは「(山を)越え見寺」から古江見寺という寺の名前が生まれ、やがてその周辺が古江見と呼ばれるようになったのではないか？

⑩ 野の・山地やまち

野地区と山地地区はいつぺんに行きます。

というのも、山地は江戸時代の始めに野から独立してできた地区なんです。元々は山地も野だったんです。

野という言葉は平らな土地という意味を持ちますが、山の裾野というように、若干傾斜のある土地を言うことが多いです。

確かに、今風力発電のある山あたりから、なかなか傾斜が今の野地区の中心部付近まで続いています。

この野地区に人が増え始め、山地が独立するのですが、山地は文字どおり山の方の土地なので、山地と呼ばれるようになったと思われます。

⑪ 新堂しんどう

この地名の由来は、紀伊続風土記きいじつふうどきという書物

に記されています。

昔古江見に古江見寺という大きな寺院がありました。古江見寺はいくつもの寺が集まってできていて、その寺の一つであった観音寺という寺が新堂に移転し、新しいお堂が建てられました。これが「新堂」の由来だとしています。現在でも観音寺（観音堂）が新堂にあります。

⑫ やまだはら しもなかしま 山田原・下中島

「山田原」も紀伊続風土記に記されています。北に山を背負った村だからということです。

「田原」は田んぼが広がる平地のことで、同様の地名が他にもたくさんあります。それらと区別するために「山」を付けて「山田原」としたのでしょう。実際、山田原は北だけでなく東側にも山があり、山に囲まれている、守られている印象を受けます。新しいお堂が建つ前の新堂など、近隣のどこかに昔々「田原」という地名があつて、区別するために「山」を付けたとも推測できます。今

はないもう一つの「田原」にも区別のため「川田原」だとか「下田原」だとか、一文字足していたかも知れません。

同じ名前の村などを区別するために、また、大きくなった村などを分割するときに、頭に一文字ずつ加えて区別する例はたくさんあります。

今の串本町の「上田原」と「下田原」などです。保田地区に拠点を置いていた湯浅氏の頭領の保田氏が、勢力を広げて清水町に拠点を置いた一派は「山保田」と呼ばれていました。

そして忘れてはならないのが、山田原のおとなりの「下中島」です。

元々は「中島」という村で、有田川町にも「中島」村があり、区別するために明治時代にそれぞれ「下中島」と「上中島」になりました。

今でも「下」を付けずに「なかしま」と呼ぶ人がいます。

昔は本当に有田川の中に島があつたようで、その島の対岸と思われる「西迎^{にしむかい}」という地名が残っています。

⑬ 辻堂 つじどう

辻堂の名前の由来は、辻（交差点）にお堂があったから、と言われていました。有田川に面しているせいか、水害などで古文書の類は残っておらず、そのお堂が何という名前で、どこにあったか、よく分かっています。

辻（交差点）ということは、道が2本あって交わっているのは間違いない。普通に考えると、東西の道と南北の道、つまり、星尾方面と古江見方面を結ぶ東西の道と、須佐神社と明神山を結ぶ南北の道だと推測できます。そうすると今の保田郵便局の辺り、位置的に称名寺を「辻堂」の候補に挙げたいと思います。

⑭ 星尾 ほしお

一説では、昔、山に星が落ちた、つまり隕石が落ちてきたので、その山を星山と呼び、そこから伸びる尾根から「星尾」と呼ばれるように

なつたと言われています。確かに、星尾の一宮神社からずっと尾根が伸びていて、保田と糸我の境目を成しています。

全国に隕石にまつわる話が残っていて、隕石が落ちた地点に「星山」「星田」など星の付く地名が付けられることがよくあるので、星尾もそうなんだと思います。

⑮ 千田 ちだ

紀伊続風土記きいしゆくふうどきという江戸時代後期に作られた書物では、「沃野広平よくやこうへい」な土地だから「千田」と呼ばれるようになったと記されています。「沃野広平」とは水の豊かな平地という意味で、確かに千田は水の豊かな平地と言えます。

ところで、万葉集に

「あぢの住む渚沙すさの入江ありそまつわの荒磯松我あらいそまつわを待つ子らはただひとりのみ」

「あぢの棲む須沙すさの入江こもの隠り沼こものあな息づか

有田市の地名について

し見ず久にして」

という二首が残っていますが、この「すさ」が有田の須佐神社周辺という説と、愛知県の知多半島にある須佐神社周辺という説があります。

面白いことに、どちらも「ちた・ちだ」の「すさ」なのです。もしかしたら、この二つの土地には何らかの関係があるかも知れないし、関係がなくても、名前の由来は同じなのかも知れません。そう考えると、有田川の河口に今ほど土砂がたまっていない昔は、須佐神社を根元として崎鼻まで細長い半島のような地形を成していたとして、知多半島は細長い半島ですし、細長い半島のことを「ちた」と呼んでいたのでは？という仮説が立てられます。

⑬ 宮原 みやはら

宮原は、そのまま、お宮のある原っぱで「宮原」となったと見て良いでしょう。くわしくはコラム23に書いてるのでご覧ください。

⑭

宮原町東、みやはらちやうがし
宮原町南、みやはらちやうみなみ
(新町)、しんまち

糸我町西 いとが ちやうにし

これらの地名は、それぞれ方角の「東」、「南」、「西」の意味で疑いの余地はないですね。地域の中心部から見て、その方角にあるからそのまま方角が名前になったと言って間違いないです。

何か、方角の地名って、裏を返せばその地域の中心地ではないととられてしまいがちですが、そうでもないんです。日本の首都は「東京」ですし、大阪の繁華街、梅田と難波は通称「キタ」と「ミナミ」と呼ばれます。まちというのは、始まりの地から外側に向かってどんどん広がるものですから、中心よりも外側の方が発展している場合がよくあるんです。

宮原町東は、逆に元々はこちらが中心だったのではと思えるほど、円満寺や春日社など、歴史的に重要な場所です。

糸我町西は、最近住宅が多く建っている印象があります。

「南」は今の宮原町新町です。紀伊宮原駅には「みなみタクシー」と書かれたタクシーが停まっています。これは「新町」の元々の名前「南」から来ています。

南地区は駅ができ、商店街もでき、宮原町の中でも栄えてきたので、昭和の大合併の時に「新町」と名前を変えました。

⑮ 宮原町畑

奈良の平城宮から出土した木簡（木に書かれた文書）の一つに

「紀伊国安諦郡幡阨郷戸主秦人小麻呂調塩三斗…」

と書かれていました。

きの国のあて郡のはた郷にいる、秦人（はたびと、渡来人、外国にルーツのある人）の小麻呂という人の税、塩三斗…と言つ意味です。

この「はた」と言う地名自体渡来人を思わせますし、実際「はた」に渡来人の小麻呂さんという人がいたことは間違いないでしょう。

「幡阨郷（はたごう）」が宮原町畑かどうか、分らない、別の場所だという人もいます。この木簡にある税が「塩三斗」というのも、当時は塩って海水で作っていましたから、山の中にある宮原町畑の住人に対する税にしては不自然な所ですね。

でも、平安時代の初めに書かれた、「日本霊異記」という説話・昔話の類を集めた書物の中に、

「海部（今の和歌山市や海南市の海岸部に広がる地域）と安諦（今の有田郡市）をつなぐ山道を玉坂と言い、浜中（今の下津）から真南向いてこの玉坂を越えれば秦の里にたどりつく」といった記述があります。地図を見れば、秦の里はもう宮原町畑しかありえません。

つまり、宮原町畑は「秦人（渡来人）」が棲む集落」と言う意味でしょう。

⑪ みやはらちようすがい 宮原町須谷

須谷は「すがい」と読みます。由来ははつきりしませんが、谷を「や」と読んで「須ヶ谷（すがや）」から「すがい」に変化したのかも知れません。ただ、「谷」を「や」と読むのはほとんどが関東方面で（渋谷とか四谷とか日比谷とか）、関西では「たに」と読むことがほとんどなので、その辺違和感があります。

昔、須谷の上流にある、有田川町の田殿地区辺りは、有田川が今よりも南側を流れていたそうです。そして、須谷の辺りは今よりも北側を流れていたと言われています。今はU字型に流れている須谷周辺の有田川は、昔は逆にU型に流れていたと思われます。

「かい」という地名は、崖崩れした所を指すことがあります。

これらのことから、須谷は「有田川に削られて崖のようになった川原のある場所」という意味なのではないでしょうか。

ちなみに現在、有田川がU型に流れている田殿地区では、山と川がすぐ近くで、崖下に川が流れているような地形になっています。須谷の対岸の、有田東大橋から環境センターにかけても崖のようになっていきます。昔の須谷は、このような地形だったのではないかと推測します。

⑫ みやはらちようたき 宮原町滝・宮原町滝川原

滝地区は宮原町の西にあるこぢんまりとした集落ですが、よく見ると滝地区の北側の山の中腹にも集落があるのが見えます。ここは宮原町畑の市原地区というところで、下津から山を越えて宮原へ続く道が通っていました（54頁参照）。

この市原から南の滝地区に向かって小川が流れていて、川沿いに人がやっと通れるくらいの道もあります。

滝って、今では垂直に落ちる水の流れを言いますが、昔はそこまでは行かない急流の川でも滝と呼んでいたようです。

この市原から滝地区を流れる川は小さいけど急流なので、昔の基準から言えば滝と呼んでも良さそうです。それでこの地区を「滝」と呼んだんじゃないかと思います。

そして、「滝川原」は「滝」の前の平らな場所だから「滝ヶ原（たきがはら）」で「滝川原」です。決して滝の前の川原（かわら）で、「たきがわら」でないのがミソです。

滝地区にある寺は「多喜寺」と書きます。漢字は違うけど「たき」と読みます。このように同じ読みでも良い意味の漢字に置き換えることがよくあって、この「滝・滝川原」も、喜び多いことを願って付けられた名前なのかも知れません。

②1 宮原町道

この地名は、南北に熊野古道が通ってるから「道」と呼ばれるようになったと言われています。湯浅町にも熊野古道沿いに道町があります。

でも、大きな道が通ってるから「道」ってな

ると、その道沿いの町はみんな「道」って呼ぶの？って話ですよ。

天皇家が足繁く熊野へ参った平安時代、当然途中で休憩や宿泊をするのですが、そういう位の高い人が休憩や宿泊ができる施設が熊野古道沿いにあったと思うのですが、その施設を堂と呼び、宮原の道や湯浅の道町にあったんじゃないかと推測します。

②2 糸我

糸我は、大変古い地名なので、由来がはっきり分かりません。

糸我地区の熊野古道沿いに「糸川」という、細くてまっすぐな川が流れていると言います。そこから「糸我」になったと推測します。金屋には「糸川」地区があつて、ここにも細くてまっすぐな糸川が流れています。日高川町に「伊藤川（いとご）」という地区があり、ここでも「伊藤川（いとかわ）」が流れています。

でも、この「糸川↓糸我」説は根拠が弱くて自信を持って言える仮説ではありません。万葉集の時代にはすでに「いとか」と呼ばれていて、「いとかわ」の「わ」がないんですから。

もう一つ仮説を挙げます。

「住処（すみか）」とか「在処（あrika）」のように○○の場所という意味の「処（か）」という言葉がありますが、これを糸我に当てはめると「糸のように細長い集落」と解釈できなくはないです。熊野古道沿いに家が建ち始めたのが糸我の一番初めの姿だとすると、それは細長い集落と言えます。

②③ いとが ちようなかばん 糸我町中番

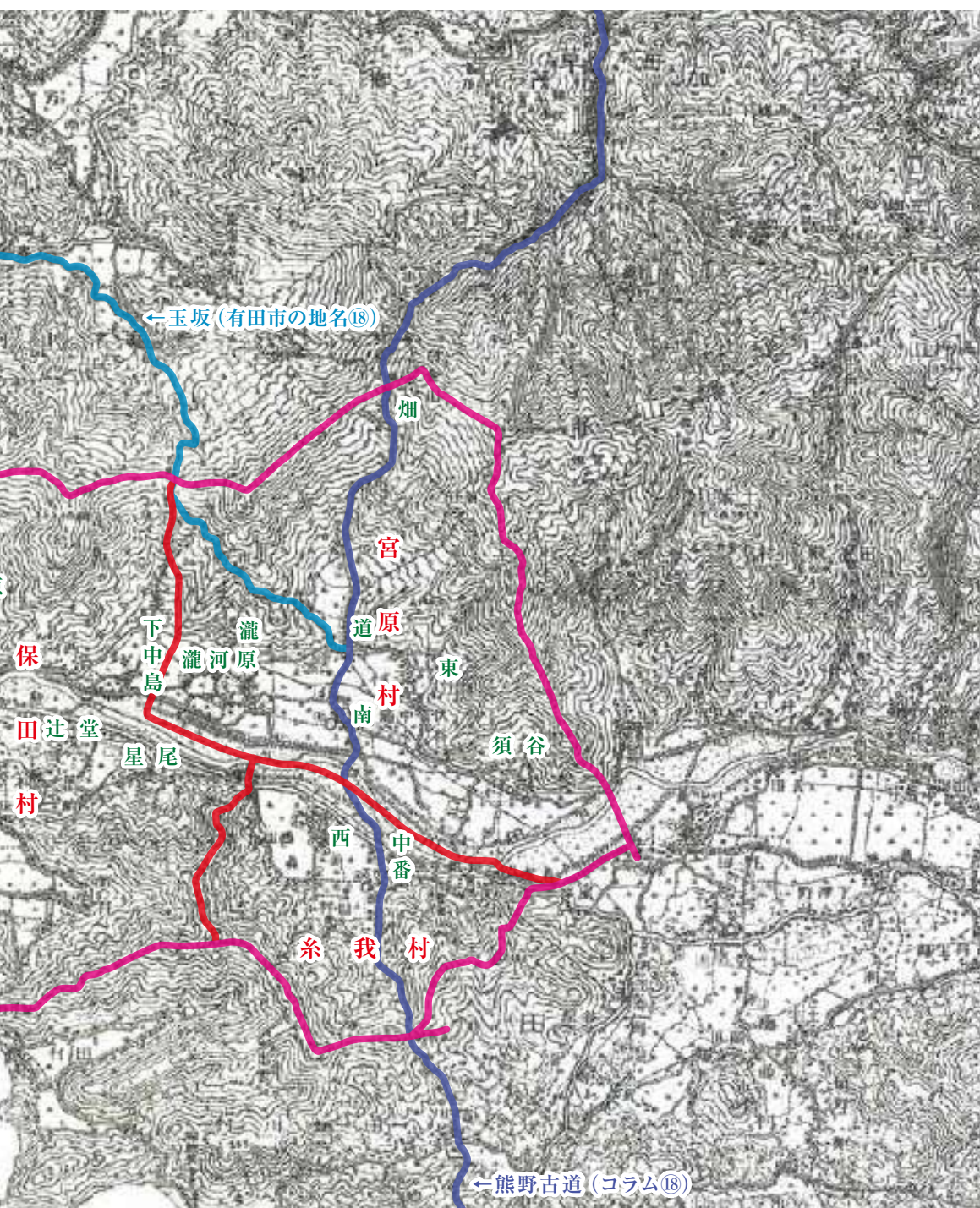
番と言葉は、今では「順番」とか「番号」とか、並んでいる数字の全体、もしくはその中の一つを指す言葉として使用することが多いですが、元来二つ以上の何かがひつつくという意味を持っていて、「蝶番（ちようつつがい）」など

で今でも使われてますね。

昔、交差点などで見張り役の人を置くことがありました。今でもそういう意味で「門番」「交番」「番犬」など使いますね。見張りつて、ずっとしなくては意味がないので、複数の人が交代でその任務を行うことから、「番」と言う言葉が使われるようになったと思われますが、その任務に当たる人がまとまって暮らす集落のことも「番」と言うようになりました。

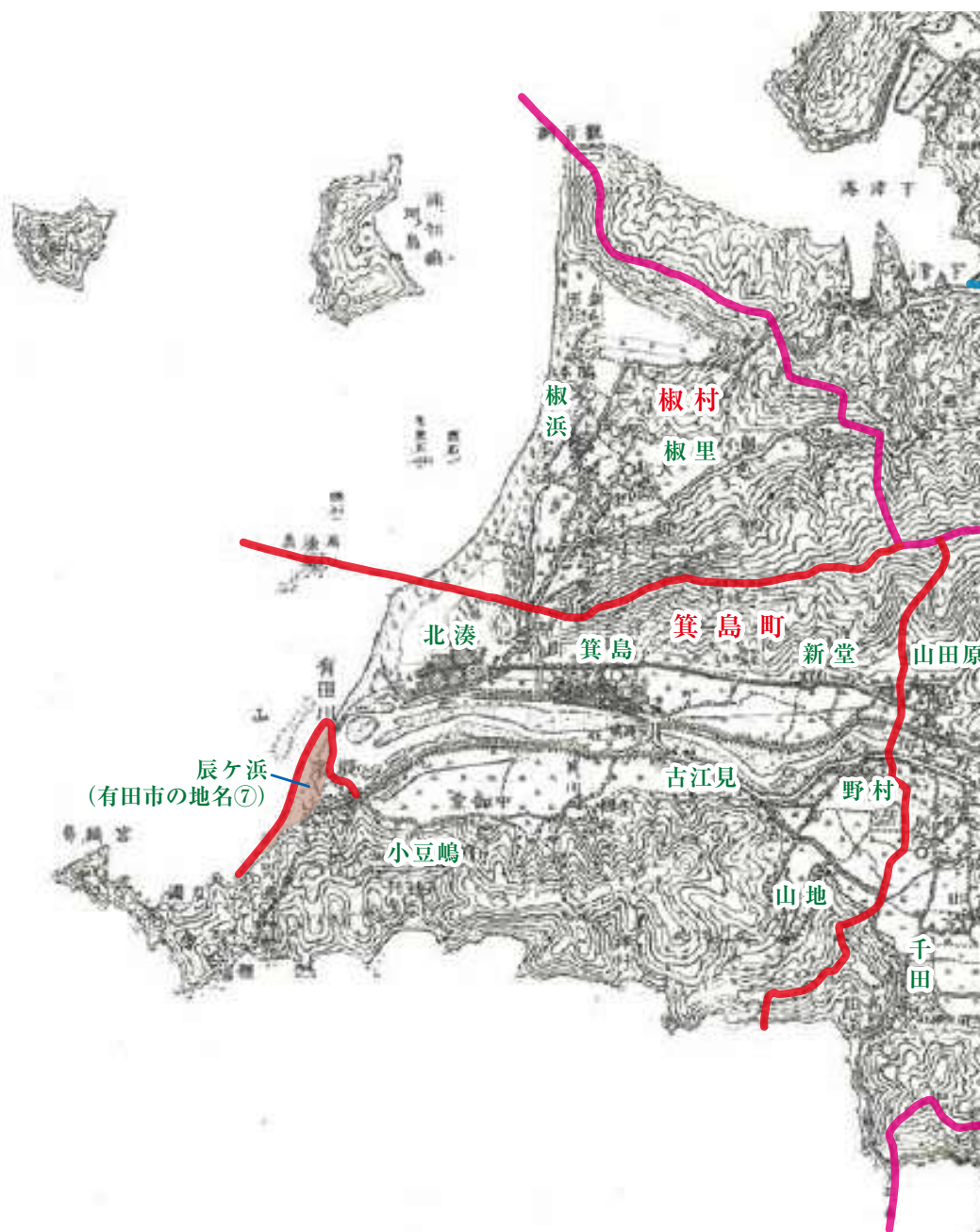
やがて、単なる集落にも「番」を使うようになったので、「中番」は「中村」ぐらいの意味になると思います。

ただ、中番は熊野古道沿いの地区なので、本来の意味で、熊野古道を通る人を見張る人が住んでいて、「熊野古道の真ん中に位置する見張りの人が住む地」という意味だったのかも知れません。



出典:大正2年4月30日、国土地理院発行5万分1地形図「湯浅」

有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



有田市の地図



時 代	西暦・年号	有田市の事柄
縄文時代	紀元前5000年頃 縄文時代中期	この頃より地ノ島で人々の生活が始まる。 (地ノ島遺跡【コラム01】)
弥生時代	紀元前10世紀頃～ 3世紀中頃	有田市内各地に人々の生活が広がる。 (津井浜遺跡、宮原奥の谷遺跡、新堂銅鐸、山地銅鐸、山地銅戈、千田奥の谷遺跡、糸我地藏堂遺跡など各地に出土品、遺跡が残る。)
古墳時代	300年～	円満寺にある内行花紋鏡が造られる。【コラム04】
	400～500年頃	椒古墳【コラム02】、野丁古墳(箕島2号墳)が造られる。 山田原で発見された画文帯環状乳神獣鏡が造られる。
	500年頃～	有田市内でも多くの古墳が造られる。 (箕島一本松古墳・新堂古墳・山田原表山古墳・宮原古墳・山地古墳・高田中尾古墳・千田岡崎古墳群・星尾古墳等)
飛鳥時代	652年 白雉3年	糸我稻荷神社創建。【コラム05】
奈良時代	713年 和銅6年	千田神社(須佐神社) 創建。【コラム03】
	729年 天平元年	長屋王自害。その遺骨を土佐(高知県)より紀伊国海部郡椒村奥ノ島に移す。【コラム02】
	奈良時代後半	宮原町東 円満寺や宮原町滝 多喜寺の前身に当たる寺院が建てられる。 【コラム04】、【有田の地名②】
平安時代	806年 大同元年	安殿皇子が即位し平城天皇となる。【有田の地名①】 同年、安諦(あて) 郡が在田(ありだ) 郡に改められる。【有田の地名①】 同年、安殿皇子の母、乙牟漏皇太后の勅願により、唐の僧如宝(阿波尼僧西阿弥という説もあり) が宮崎町浄妙寺を創建する。【コラム09】
	807年 大同2年	古江見寺(今の古江見安養寺・新堂観音寺・宮崎町蓮花寺など)を空海が創建。【有田の地名⑨、⑩】
	816年 弘仁7年	宮原神社創建。(当時は八幡社として)【コラム23】【有田の地名⑯】
	877年 元慶元年	箕島 常楽寺創建。
	907年 延喜7年	宇多法皇初めて熊野に参詣。皇族・貴族の熊野参りが始まる。【コラム18】
	931- 8 承平年間	安養院を得生寺と改める。(糸我町中番)
	1062年 康平5年	初島 正善寺の大日如来が造られる。【コラム06】
	1151- 4 仁平年間	糸我町西 仁平寺(真砂寺) 草創。
	1165年 永元元年	宮原町須谷 福勝寺が開基される。
	1169年 嘉応元年	田辺別当湛全の弟、定範、野に城を築き宮崎氏を名乗る。 野 仏願寺創建。 立神社が祀られる。【コラム13】
	1169- 71 嘉応年間	千田 地藏寺、山田原より現在の地に移設される。
鎌倉時代	鎌倉時代前期	湯浅宗重が岩室城を築城。
	1185年 文治元年	平忠房、湯浅宗重の助勢を受け岩室城に立てこもる。【コラム07】
	1186年 文治2年	湯浅宗光、保田庄地頭となる。【コラム07】
	1203年 建仁3年	明恵上人、星尾の湯浅(保田) 宗光屋敷で春日明神の神託を受け天竺行きを思い止まる。【コラム08】
	1204年 元久元年	下中島 地福寺が創建される。
	1236年 嘉禎2年	明恵上人の弟子喜海、明恵上人紀州八所遺跡卒塔婆建立。【コラム08】
	1249- 56 建長年間	宮原町畑 広利寺が開基される。【コラム10】
	1262年 弘長2年	星尾 神光寺(星尾寺)、湯浅(保田) 宗業の寄進によって建立される。【コラム07】
	1282年 弘安5年	現在の宮原町東 円満寺が創建される。【コラム04】
	1288- 93 正応年間	糸我町西 延命寺開基。
	1334- 38 建武年間	この頃、貴志行兼が辻堂に住み保田庄を支配。【コラム07】

年表

時 代	西暦・年号	有田市の事柄
南北朝時代（室町時代）	1344年 康永3年	明恵八所遺跡の卒塔婆が石造に改められる。【コラム 08】
	1360年 延文5年	畠山国清、紀伊に侵攻し、湯浅党滅亡。【コラム 07】
	1375年 天授元年	辻堂 称名寺が建立される。
室町時代	1408年 応永15年	畠山満家、岩室城を改修。【コラム 07】
	1421年 応永28年	地頭吹田氏等、初島国主神社を造営。
	1428年 正長元年	畠山持国、宮原を領して岩室山に城を増築拡大。【コラム 07】
	1429- 40 永享年間	山田原 法華寺が實志理宗により建立される。
	1476年 文明8年	下中島 光明寺が開基される。 宮原町滝川原 浄満寺が備前の浪士児島氏により開基される。
	1488年 長享2年	有田川洪水。これ以後に北原村が川南より川北の須谷に移る。【有田の地名⑨】
	1493年 明応2年	有田川洪水。宮原に粟生四社明神の一社が再度漂着。以後宮原庄南に天神社として祀る。 野 光源寺が宮崎氏によって建立される。
	1501年 文亀元年	糸我町西 蓮光寺、正了により開基。
	1504- 21 永正年間	初島町里 安楽寺開創。 新堂 本光寺が宮崎城主により創建される。
	1504年 永正元年	初島町里 善福寺開基。
	1506年 永正3年	宮原町滝川原 浄念寺が開基される。
	1521- 8 大永年間	宮原 善国寺が畠山政国によって建立される。 野 本宮寺が宮崎定頼によって開基。
	1522年 大永2年	宮崎町 法正寺が宮崎二郎（法了）によって開基される。
	1523年 大永3年	港町 教念寺が中興される。
	1524年 大永4年	箕島 浄応寺の本尊が造られる。（この頃に建てられたか）
	1533年 天文2年	宮崎定秋の誓願により宮崎町 蓮華寺が東国尾に再建される。
	1535年 天文4年	箕嶋神社が祀られる。（当時は水主神社として）【有田の地名⑤】【コラム 11】
	1538年 天文7年	初島町里 光明寺、東山道祐により創建。
	1572年 元龜3年	港町 極楽寺が建てられる。
安土桃山時代	1573年 天正元年	前将軍足利義昭、立神社に流寓する。
	1574年 天正2年	伊藤孫右衛門、八代より小蜜柑の小木を持ち帰る。【コラム 15】
	1579年 天正7年	湯浅の白樫実房、須佐神社を破却する。【コラム 03】
	1585年 天正13年	秀吉紀州征伐。宮崎城、岩室城落城。諸社寺兵火により荒廃する。【コラム 07】
江戸時代	1604年 慶長9年	熊野街道に一里塚を築く。糸我一里塚もこの頃築かれたか。【コラム 18】
	1619- 23 元和年間	徳川頼宣、茂兵衛・茂太夫の2夫婦を串本町古座より矢櫃に移住させ漁業を奨励する。また、郡中に山畑を開墾し、蜜柑の栽培を勧める。【コラム 15・17】
	1624- 44 寛永年間	慶長の初め頃より各村に植えられていた蜜柑が次第に増え、この頃には大阪、堺、伏見等へ小舟で出荷する。【コラム 15】
	1634年 寛永11年	滝川原村の藤兵衛、初めて400籠の蜜柑を北湊から江戸に送る。【コラム 15】
	1658年 万治元年	有田川洪水により決壊した新堂横堤を望月太左衛門が苦心の末修築。【コラム 14】
	1661年 万治4年	初島 天神社が祀られる。（もっと昔からあるかも）
	1683年 天和3年	初島 国主神社が現在の地に移される。
	1685年 貞享2年	紀伊国屋文左衛門、風雨を冒して蜜柑を江戸に送る。【コラム 16】
	1689年 元禄2年	星尾 阿弥陀寺が現在の地に移される。
	1697年 元禄10年	山地村、野村より分村【有田の地名⑩】

時 代	西暦・年号	有田市の事柄
	1707年 宝永4年	大地震。北湊、辰ヶ浜被害大。
	1716～36 享保年間	港町光禅寺が僧益道によって中興される。
	1721年 享保6年	この頃から宮崎陶器商人が九州伊万里、有田に進出するなど活動活発となる。
	1727年 享保12年	初島町里 正善寺が金剛寺から名前を改める。【コラム 06】
	1736年 元文元年	田中善吉、薩摩に行きサツマイモ苗、ハゼノキ苗を持ち帰る。【コラム 11】
	1745年 延享2年	田中善吉がハゼノキ栽培を各郡に奨励。【コラム 11】
	1752年 宝暦2年	初島町里 心光寺が今の地に移設される。
	1793年 寛政5年	日根藤六、宮原の堤竣工。
	1794年 寛政6年	徳本上人、岩室山にて1801年 享和元年まで修行。本居宣長、須佐神社参拝。郷中で歌道を教える。
	1830～44 天保年間	辰ヶ浜の漁民、打瀬網を始める。【コラム 25】
	1835年 天保6年	宮原町新町 西法寺が開基創建される。
	1836年 天保7年	天保の大飢饉。
	1842年 天保13年	白井久蔵により、上田和隧道全通。
	1854年 嘉永7年 安政元年	6月と11月に大地震、被害甚大 蜜柑方騒動。紀州藩が販売利益を直接支配しようとしたのに対して、有田の農民が反発、打ち壊し等を行った。
	1867年 慶応3年	箕島に田中善吉を祀る田中神社建立。【コラム 11】 田中善左衛門、桑苗3万3千本を郡内18か村に配布するなど養蚕業を奨励。
明治時代	明治初期	明治維新、廃藩置県により自治体や学校の改編が繰り返される。 神仏分離令により神社と寺が区別される。結果修験道などが衰退する。
	1873年 明治6年	この頃より各地区に小学校が開設される。
	1877年 明治10年	野井で銅鐸発見。
	1886年 明治19年	上山英一郎、除虫菊を導入。以後山田原の名士等により除虫菊の増産が重ねられる。【コラム 19】
	1888年 明治21年	港町 摩尼寺（赤岩観音）が再興される。
	1889年 明治22年	町村制施行により、椒、宮崎、保田、宮原、糸我の5村が誕生。 山地で銅鐸発見。
	1890年 明治23年	上山英一郎「棒状蚊取線香」発明
	1895年 明治28年	道八幡社、宮原神社と改称。【コラム 23】
	1896年 明治29年	名草郡と海部郡が合併、海草郡となる。海部郡椒村は海草郡椒村となる。【有田の地名②】
	1901年 明治34年	宮崎村に町制施行、箕島町となる。【有田の地名⑤】
	1902年 明治35年	上山英一郎、渦巻型蚊取線香を特許出願。【コラム 19】
	1906年 明治39年	宮崎町 蓮花寺が現在の地に再建される。 この頃より神社合祀が進められ、基本的に神社は一町村につき一つにまとめられ、多くの神社が失われる。
	1907年 明治40年	羽部隆之助、逢井・高田に八角網定置。【コラム 25】
大正時代		明治末期から大正にかけて、石碑建立が多く成される。
	1916年 大正5年	山地で銅戈6個出土。
	1918年 大正7年	米騒動。 「スペイン風邪」流行。死者多数。
	1919年 大正8年	大日本除虫菊株式会社（金鳥）を始め多くの蚊取り線香の会社が法人化される。【コラム 19】
	1924年 大正13年	箕島駅開設。箕島駅～辰ヶ浜間にバス開通。【コラム 21】
	1925年 大正14年	紀伊宮原駅開設。【コラム 21】

年表

時 代	西暦・年号	有田市の事柄
昭和時代	1929年 昭和4年	有田川河口沖を震源とする強震（煙突、石灯笼倒壊等）
	1932年 昭和7年	新堂で銅鐸2口出土。 保田橋、宮原橋開通。
	1933年 昭和8年	帆打瀬漁船に発動機装着開始。【コラム 25】
	1934年 昭和9年	室戸台風。校舎倒壊、安諦橋流出、矢櫃・男浦・女浦の被害甚大。
	1938年 昭和13年	初島駅開設。【コラム 21】
	1941年 昭和16年	初島幼稚園開設。 東亜燃料和歌山工場操業開始。【コラム 22】 太平洋戦争勃発。
	1943年 昭和18年	寺社の釣鐘等を軍需資材として供出。 大日電線株式会社箕島工場操業。
	1944年 昭和19年	戦争激化。空襲、学徒動員、集団疎開、運動場の開墾など。 東南海地震。
	1945年 昭和20年	東燃和歌山工場が空襲により全機能を喪失。【コラム 22】 終戦。
	1946年 昭和21年	南海大地震。辰ヶ浜に1.5mの津波。
	1947年 昭和22年	公選町村長選出。 新制中学校開校。箕島中学校、保田中学校、文成中学校、椒（初島）中学校。
	1948年 昭和23年	県立箕島高等学校設置。 農業協同組合設立。
	1949年 昭和24年	文成高等女学院開設。 宮原、箕島、保田、糸我公民館開設。
	1950年 昭和25年	東燃和歌山工場操業再開。【コラム 22】 箕島病院竣工開業。
	1952年 昭和27年	箕島保育所開設。
	1953年 昭和28年	椒村、町制施行し初島町となる。【有田の地名②、③】 私立仏徳幼稚園設立。 集中豪雨、有田川堤防寸断、未曾有の大災害。（7.18水害）【コラム 26】 滝川原にたちばな保育所を開設。
	1954年 昭和29年	糸我に私立ひばり幼稚園開設。 有田川洪水。仮堤防決壊。 箕島町・保田村・宮原村・糸我村の4か町村合併、有田町誕生。【有田の地名①】
	1955年 昭和30年	初島町議会、有田町と合併協議。 港町保育所、辰ヶ浜保育所開設。 箕島 太平寺創建。
	1956年 昭和31年	有田町市制施行、有田市となる。【有田の地名①】
	1957年 昭和32年	新堂堤防工事完工。【コラム 14】 有田警察署発足。 長寿荘開所。 市立箕島病院を有田市立病院と改称。
	1958年 昭和33年	広報ありだ発刊。 有田保田郵便局現在地に移転。 有田市役所、現在の文化福祉センターの地に移転。 宮崎公民館開設。 保田保育所開設。
	1960年 昭和35年	港町公民館開設。 上水道工事完成、給水開始。
	1962年 昭和37年	有田市・初島町合併。 初島に楚都浜幼稚園開設。 初島公民館（有田市役所初島支所併設）竣工。

時 代	西暦・年号	有田市の事柄
	1963年 昭和38年	有田市文化協会結成。 有田福島郵便局開設。 安諦橋竣工。 箕島第二小学校矢櫃分校廃止。 有吉佐和子、小説「有田川」発行。【コラム 26】
	1964年 昭和39年	宮原保育所開設。
	1965年 昭和40年	有田市消防本部設置。有田市消防署開設。 有田市体育協会結成。 吉備町議会、有田市と合併決議。 今の港町公民館竣工。 逢井簡易郵便局開設。
	1966年 昭和41年	県議会、有田市・吉備町合併案否決。
	1967年 昭和42年	ウエノ公園設置。
	1968年 昭和43年	紀勢本線複線化。【コラム 21】
	1969年 昭和44年	紀州有田商工会議所創立。
	1970年 昭和45年	大阪万博 和歌山特報創刊。 旧有田市民会館竣工。 箕島高校、第42回選抜高校野球大会全国優勝。 市民プール、若者広場プール開設。 宮原郵便局、現在地に移転。
	1971年 昭和46年	旧消防庁舎竣工。 和歌山黒潮国体開催。有田市はボクシングとホッケーを実施。 うち箕島高校ホッケー男子が優勝 保田農業会館（今の保田公民館）竣工。 箕島中央公民館（今の箕島公民館）竣工。 箕島高校に機械科新設。
	1972年 昭和47年	初島保育所開所。
	1975年 昭和50年	古江見保育所開所。
	1976年 昭和51年	宮原公民館竣工。 糸我保育所開所。
	1977年 昭和52年	港小学校開校。 箕島高校、選抜高校野球大会で2度目の全国優勝。 宮崎公民館竣工。 集団コレラ禍。
	1979年 昭和54年	箕島高校、選抜高校野球大会で3度目の全国優勝。 箕島高校、史上3度目の春夏連続優勝。 紀文まつり始まる。【コラム 16】
	1980年 昭和55年	宮原保育所、現在の地に移転。 港町消防化学基地開所。
	1981年 昭和56年	かぐの実会館（今の糸我公民館）竣工。 環境センター、及び有田市清掃センター竣工。
	1982年 昭和57年	有田勤労者体育センター（今の有田市民体育館）工事開始。
	1983年 昭和58年	有田バイパス供用開始。 糸我町西 福生寺創建。
	1984年 昭和59年	有田市立病院新館完成。
	1985年 昭和60年	市民テニスコート完成。 し尿処理施設クリーンセンター完成。
	1986年 昭和61年	養護老人ホーム長寿荘新築移転。
	1987年 昭和62年	現在の市役所完成。

年表

時 代	西暦・年号	有田市の事柄
平成時代	1989年 平成元年	有田市文化福祉センター、旧有田市図書館、有田市郷土資料館、有田市みかん資料館開設。
	1990年 平成2年	箕島保育所完成。
	1992年 平成4年	男浦埋立地竣工。
	1993年 平成5年	保田橋北に「日本一有田みかん」のジャンボ壁画完成。
	1995年 平成7年	阪神淡路大震災発生。 男浦水泳場完成。
	1996年 平成8年	有田市民球場開場。
	1997年 平成9年	有田辰ヶ浜郵便局が現在地に移転。 有田東大橋完成。 ふるさとの川総合公園開設。
	1998年 平成10年	有田中央大橋完成。
	1999年 平成11年	旧法務局を改修し、中央地区公民館開設。 くまの古道歴史民俗資料館・くまの古道ふれあい広場完成。
	2001年 平成13年	有田市福祉館「なごみ」完成。
	2003年 平成15年	宮原跨線橋開通。 初島公民館改修完了。 有田市・湯浅町・広川町合併協議会設置。1年後協議中止。
	2004年 平成16年	初島中学校新校舎完成。
	2010年 平成22年～	有田市内の学校で耐震補強工事が順次行われる。
	2011年 平成23年	東日本大震災発生。 文成中学校新校舎完成。 旧有田市民会館解体。
	2012年 平成24年	初島保育所と港町保育所を統合し、そとはま保育所開設。
	2014年 平成26年	有田市消防本部が旧有田市民会館跡地に移築。
	2015年 平成27年	紀の国わかやま国体開催。有田市は軟式野球と近代3種を実施。
	2017年 平成29年	有田市民会館新築。有田市図書館が新有田市民会館2階に移設。
	2018年 平成30年	有田市文化福祉センター内の旧有田市図書館跡地に子育て世代活動支援センター「Waku Waku」オープン。
令和時代	2020年 令和2年	新型コロナウイルス流行する。 浜のうたせオープン。 えみくるARIDA（有田市民水泳場）オープン。 市民劇「有田川」実施。【コラム 26】
	2021年 令和3年	箕島保育所閉所。 紀の国わかやま総文2021開催。有田市は文芸を実施。 紀の国わかやま文化祭2021開催。有田市は川柳ほか実施。 市民劇「有田川」再演。【コラム 26】
	2022年 令和4年	初島中学校閉校。 有田海南道路（仮称）1号橋完成。
	2024年 令和6年	市内4中学校を統合して有和中学校開校。

参考文献

- ・有田市誌／有田市誌編集委員会（昭和49年7月）
- ・箕島町誌たちばな乃里／箕島町編纂委員会（昭和26年9月）
- ・初島町誌／初島町教育委員会（昭和37年7月）
- ・椒村是
- ・角川日本地名大辞典30／「角川日本地名大辞典」編纂委員会（昭和60年7月）
- ・糸我郷土誌／糸我愛郷会（平成2年）
- ・市制50周年 私たちの有田市／有田市（平成18年3月）
- ・地名の研究／柳田国男（平成29年4月）
- ・地名でわかる水害大国・日本／楠原佑介（平成28年7月）
- ・地名の語源と謎／丹羽基二（昭和63年4月）
- ・地名の謎を解く／伊東ひとみ（平成29年7月）
- ・日本の地名雑学事典／浅井建爾（平成17年10月）
- ・湯浅党城館跡総合調査報告書／
- ・有田市教育委員会・湯浅町教育委員会・有田川町教育委員会（令和2年3月）
- ・中世武士団と地域社会／高橋修（平成12年3月）
- ・信仰の中世武士団 湯浅一族と明恵／高橋修（平成28年8月）
- ・紀伊続風土記
- ・紀伊國名所圖會

・「季節の花300」<https://www.hana300.com/>
・「ヤサシイエンゲイ」植物の育て方図鑑
<http://www.yasashi.info/index.html>

協力

- ・有田市郷土資料館
- ・有田市文化協会
- ・有田市産業振興課

協賛

- ・一般財団法人 再生ありだ



←もっと有田の歴史を詳しく知りたい方はチェックしてください！
有田市観光協会公式サイト